津城先生、ご発表ありがとうございました。本日は出席できずとても残念ですが、論文を読ませていただいたうえで、コメントと質問をさせてください。

　上座部仏教では出家修行者が歌舞音曲を楽しむことを禁じられていますが、日本のご詠歌のような法の歌(dhamma-gīta/ghātā)を作成して、指導者が先導して弟子や信者たちが唱和することは法の実践として許され、テレビや映画のない時代の娯楽のように、よく実践されています。例えば、ノーベル平和賞の候補にもなったカンボジア僧のマハー・ゴーサナンダ師は、難民の仏教徒たちと共にダンマパダ（法句経）の第5偈「実にこの世では恨みはいつまでたっても恨みによっては鎮まらない。恨まないことによってのみ恨みは鎮まる。これは永遠の法である」という詩偈を、涙が枯れるまで長い時間にわたって一緒に「歌った」と伝え聞いております。

　相応部の『詩偈を伴う章』には、神や悪魔たちが投げかけた問に答えたブッダの韻文・歌があります。

「詩偈は韻律を因縁とし、言葉により生じる。名称に依存し、詩人を住み家となす」

「私には語るものがない、語る人は私ではないと、悪魔よ、このように知るがよい。お前には私の道が見えない」

　こうした韻文には、状況を俯瞰的に把握して慣れ親しんだ言葉のリズムで伝える距離感があり、散文には実際の状況を生中継するライブ感があるように感じています。

　解剖学者の三木成夫は『生命の形態学：地層・記憶・リズム』において、生の原形は「らせん」と「リズム」をもって性と食の位相交代の波を刻み、「遠」を観得する植物的要素と「近」を感受する動物的要素として、人体構造の中に植物器官としての内臓系と動物器官としての体壁系として刻み込まれていることを形態的に説明しています。彼によると人類の呼吸は植物的な生命呼吸と動物的な意思呼吸との合作であり、先史人類の生命的呼吸には仕事と呼吸との調和があり、吸気と呼気のリズムに乗った「唄」は表情を持った呼吸と言えるものでした。そこに意思呼吸が重なることにより、呼吸は自我意識を介して大脳皮質からの支配を受けるようになります。和歌は、その意思呼吸が拍を生み出す生命呼吸に重なり合う形で生まれてくるのでしょう。

　音楽療法家のS.マーロックは、赤ちゃんの喃語とお母さんの日常言語によるやり取りがうまくいっている時には、リズムとメロディとナラティブが、数学的に検出できることを解明しました。このナラティブの要素が、津城先生のおっしゃるポリティクスの基盤となり、お互いの発話のリズムに乗って、それぞれの本心を見つけ出してゆくトーンが唄・歌を奏でるポエティクスとなるのだと思います。

これは臨床場面においてセラピストのあたたかい見守りの沈黙の中で、クライアントが自らの経験に最も近い言葉を紡ぎ出し、受けとめてもらうことによって新しい自分を形成し続けてゆく瞬間に似ています。またそれは、弾き語りする歌を授かる時、リズムとメロディと言葉が一つになってインスピレーションが降りてくる瞬間にもよく似ています。

　最後に一つ質問させてください。和歌における「遠を観得する」植物的な要素とは、「近を感受する」動物的な要素とは何でしょうか？　この問いが津城先生の研究のお役に立つことができれば、皆さんの議論の小さな刺激になることができれば幸いです。